

かにし得ないような、被験者の内的過程を分析する必要を論じ、そのための方法として面接法を採用する試みについて述べた。この方法を取り入れることは、この領域ではまったく新しい試みであり、今後いくつかの問題を解決しながら研究を続ける予定である。もう1篇は「写

真による印象形成の研究」の第2報告で、ここでは用いるべき評定尺度の選定のための資料が分析された。

3. その他、集団課題解決の研究は進んでいない。依頼に応じて雑文を数篇書いたに止まった。この点が特に本年度の心残りである。

## この1年の歩み —昭和48年— 村上英治

1 統教授が急逝されて、すでに1年数ヶ月を経た。敬愛する先学からの影響の大きかったことを、今改めて思う。深くその死を悼みつつ、この年の研究活動は、その先学の遺された研究遺産のあとを嗣ぐことから始められた。研究室の机の上に、手がけられたままに残された図表とメモを手がかりに、中部広告研究会心理測定専門委員会の仲間と共に、そのグループのリーダーとして故統教授が示そうとされた方向性を模索しながら、私たちがなりにまとめあげたのは、48年8月刊行された「中部広告研究」第5巻所載の試論「購買行動タイプの分類に関する試み—16パタンの設定から具体的記述まで—」である。

統有恒選集刊行委員会の手で編集された、金子書房刊「教育心理学の探求」(48年9月)が、命日にあたる9月25日、その霊前に捧げることが出来たのは、私ども教室員全員の、せめてもの故教授への顕彰の気持の具体化であったともいえるが、今1つ、やはりこの先学に励まされて、担当することになっていた、東京大学出版会刊行の「心理学研究法」シリーズ、第12巻「臨床診断」の編輯をどうにか終え、この1月出版の運びに到ったのも、私として何かしら心ほっとさせられる思いである。

2 形式的には「性格心理学及び心理検査法」の講座にこの4月から移ったものの、私自身、今もなお臨床心理学専攻の徒としてのアイデンティティをもつ。日本臨床心理学会そのものは、ここ数年の流れの中で改革委員会の手によって、大きく性格を変えつつあるが、私自身、その新しい胎動と変革の志向性に共感しつつも、私は私なりの歩みをこれからもつづけていきたいと願う。

精神病院における臨床実践の中で、ここ数年関心を抱きつけてきた、精神病者の社会復帰への願いは、昨年までの一連の学会報告及び本紀要19巻所載の論文をひきついで、本年も、より強力なゆきぶりかけを志向しての実践が、48年5月、名古屋大学教養部における東海心理学会第22回大会での口頭発表としてまとめられた。

同じく共通の仲間と共にすすめてきた、精神分裂病者を特に対象としての、ロールシャッハ法にもとづく現象学的接近は、その研究グループにおける数度の、あるい

は合宿しての討論の成果として、仲間のうちの2名によって、一つは渡辺雄三による「ロールシャッハ法への現象学的接近、その序論的報告—ある精神分裂病者の世界と、その自己確立の様態の現存在分析的理解—」として、今一つは、池田博和による「精神分裂病者における《還帰》の人間学的意味方向—ロールシャッハ反応への現象学的接近による—考察—」としてまとめられ、共に牧書店刊「ロールシャッハ研究15巻」(48年度内刊行予定)に収録された。

3 私自身の今一つの大きな関心は、精神薄弱児を中心とする障害児に、いぜん向けられる。

この4月、東海学術奨励金を得ての「重度精神薄弱幼児の集団療育」の実践と、それにもとづく研究は、毎週一回、障害幼児8名を対象とする母子通園形態で、今年度も、一昨年、昨年の実践をふまえてうけつがれた。私自身、今年は積極的に母親に対する集団面接を担当すると共に、臨床心理相談室の仲間と一緒に、障害幼児に対する、毎週実践の都度の「かかわり体験」の記述をつみ重ねてきている。再度にわたる合宿討議を経て、これまた、今年度の終わりには、ここ3年間の研究のまとめを試みることを意図している。

今年で4年目に入った、学部学生のための、教育研究実習の一環としての、コロニー実習は、その都度、現場での実践のきびしさとの対決をとおして、思いを新たにさせられるという点で、私にとって大きな意義を持つ。今夏のとりくみは、「重度精神薄弱児への人間学的接近(第3報)」及び「(第4報)」として、実習参加者全員の集団討議によってまとめられてきた。後者は、今少しの検討を残しているが、前者は、副題を「ある盲精神薄弱者との出会い」として、大学院生、後藤かをりととの共同研究として、本紀要20巻に所載されるところとなる。

数年にわたる、愛知県コロニー、富安芳和らとの共同研究、精神薄弱児の適応行動尺度の日本版標準化は、48年4月、日本文化科学社から、「適応行動尺度の手引—児童用、成人用—」として刊行された。富安、松田を中心にそれらの資料をもとにする統計的分析は、日本特

特殊教育学会第11回大会(48年10月,岐阜大学)及び日本教育心理学会第15回総会(48年10月,福岡教育大学)において報告され,また,昨年までの研究の成果は,富安

によって「精神遅滞者の適応行動の構造 1 因子分析の試み」としてまとめられ,特殊教育学研究に投稿されている。(12月19日)

## 最近の研究経過報告 丸井文男

### 1. 自閉症研究

本紀要17巻以来,4つの論文をグループとして報告してきた。

本年度は,次の課題についてとりくんできた。

1) 数年来,継続して追求してきた自閉症症候群についての新しい類型化の研究は,最も大きな課題であり,現在もその体系化に努力中である。

2) NAUCL 及び NAUDS の作成。上記の研究に関連し,今回,自閉症症候群を治療過程から分析するための共通的,基本的資料として,2つのカルテ及びスケールを作成した。

NAUCL は,追跡用の詳細なカルテであり,NAUDS は,治療過程において,その都度,症候群の変化,発達について評定するためのスケールである。これらは,今後のこの分野の研究に,可成り有用なものと考えている。

3) われわれのクリニックでかかわってきた自閉症児の数は,約40名を越える現状であるが,症児の治療がすすむとともに,幼稚園(又は保育園)や小学校へ進む年令に達し,集団への適応ということが臨床的,現実的な課題となってきている。現在は,殆んどどの症例が何んらかの集団に参加が出来るようになってきている。しかし,それまでの過程において,大部分の症児について,治療担当者は,園又は,学校へ出向き,状態像の説明とともに,受け入れや指導方針について協力をお願いして,出来るかぎり集団適応の状況の把握にもこころがけてきた。

今回,第1報告として,集団適応の現状を把握し,将来の指導方針の確立に近づく手がかりを得ようとしてき

た。その成果は,次回21巻に掲載する予定である。

なお,この研究をすすめるための共通理解を深める目的で,6月に10数名のグループメンバーで,武蔵野東幼稚園への一泊の見学旅行を行なった。つとに,その名の高かったこの園での見学は,われわれに多くの知見を与えてくれた。

### 2. Mental healthy personality の研究

昨年来,5名のグループで,高校生の精神健康度の研究をすすめている。現今の高校生は,その学校の格差とともに,大学進学率の増大に伴い,自殺者の増加や,意欲減退傾向者の増加がみられる。これは大学入試制度のみでなく,多面的な角度からのこの成因の解明と指導助言の方式の確立が必要と考えている。

そこで,Herzberg, F. が職場人に対しての研究によってたてられた Motivian—Hygiene 理論を,高校生に延用することを考えた。

予備調査の検討は,昨年来,数高校の生徒を対象にして,実施してきた。

しかし,現状では,Herzberg 理論をそのまま高校生にあてはめて研究をすすめる研究方法を明確にしてゆくことにいくつかの障害があることがわかった。これを克服するために今後なお方法論的検討をすすめてゆく所存である。

3. 3年前から治療を継続してきた自己催眠現象時における犯罪行為を発生した稀有な事例については,予期以上の成果を得たので,次21巻に詳細に掲載する予定である。

## 内田良男

本年度は特に著しい成果はない。下記事項については継続する。

1. 統計数理について
2. 教育統計について
3. 検査法について

つぎの事項については,調査・研究の結果を1965年に

報告したが,その後の情勢を考慮し,さらに検討すべきであるという状況であり,その準備を始めた。

### 4. 統計教育について

なお,本年度は「一宮市青年実態調査」(委員長名大教育学部 教授 小堀勉)に協力している。報告書完成は来年度の予定。(1973年12月20日)